校異源氏物語・にほふ兵部卿

ひかりかくれ給にし後かの御影にたちつき給へき人そこらの御すゑすゑにありかたかりけりおりゐの御門をかけたてまつらんはかたしけなしたうたいの三宮そのおなしおとゝにておひいて給し宮のわか君と此二所なんとり　くにきよらなる御名とり給てけにいとなへてならぬ御有さまともなれといとまはゆきゝはにはおはせさるへしたゝよのつねの人さまにめてたくあてになまめかしくおはするをもとゝしてさる御なからひに人の思きこえたるもてなし有さまもいにしへの御ひゝきけはひよりもやゝたちまさり給へるおほえからなむかたへはこよなういつくしかりけるむらさきの上の御心よせことにはくゝみきこえ給し故三宮は二条院におはします東宮をはさるやむことなき物にをきたてまつりたまて御門きさきいみしうかなしうしたてまつりかしつきゝこえさせ給宮なれはうちすみをせさせたてまつり給へと猶心やすき古さとにすみよくし給なりけり御元服し給ては兵部卿ときこゆ女一の宮は六条院南のまちのひんかしのたいを其世の御しつらひあらためすおはしまして朝夕に恋忍ひきこえ給二宮もおなしおとゝのしん殿を時ゝの御やすみ所にし給て梅つほを御さうしにしたまふて右のおほい殿の中ひめ君をえたてまつり給へりつきの坊かねにていとおほえことにをも　くしう人からもすくよかになん物し給けるおほい殿の御むすめはいとあまたものしたまふ大ひめ君は東宮にまいり給て又きしろふ人なきさまにてさふらひ給ふそのつき　くなをみなつゐてのまゝにこそはと世の人も思きこえきさいの宮ものたまはすれと此兵部卿の宮はさしもおほしたらす我御心よりおこらさらむ事なとはすさましくおほしぬへき御気色なめりおとゝもなにかはやうのものとさのみうるはしうはとしつめ給へとまたさる御けしきあらむをはもてはなれてもあるましうおもむけていといたうかしつきゝこえ給六の君なんその比のすこし我はと思のほり給へるみこたち上達部の御心つくすくさはひにものし給けるさま　くつとひ給へりし御方　くなく　くつゐにおはすへきすみかともにみなおの　くうつろひ給しに花ちるさとゝきこえしは東の院をそ御そうふむ所にてわたり給にける入道の宮は三条宮におはしますいまきさきはうちにのみさふらひ給へは院のうちさひしく人すくなに成にけるを右のおとゝ人の上にてい

にしへのためしをみ聞にもいけるかきりの世に心をとゝめてつくりしめたる人の家ゐのなこりなくうちすてられて世のなこりもつねなくみゆるはいとあはれにはかなさしらるゝをわか世にあらんかきりたに此院あらさすほとりのおほちなと人かけかれはつましうとおほしのたまはせてうしとらのまちにかの一条の宮をわたしたてまつり給てなむ三条殿と夜ことに十五日つゝうるはしうかよひすみ給ける二条院とてつくりみかき六条の院の春のおとゝとて世にのゝしる玉のうてなもたゝひとりの御末のため成けりとみえて明石の御方はあまたの宮たちの御うしろみをしつゝあつかひきこえ給へりおほいとのはいつかたの御事をもむかしの御心をきてのまゝにあらためかはる事なくあまねきおや心につかうまつり給にもたいの上のかやうにてとまり給へらましかはいかはかり心をつくしてつかうまつりみえたてまつらましつゐにいさゝかもとりわきて我心よせとみしり給へきふしもなくてすき給にし事をくちおしうあかすかなしう思出きこえ給あめのしたの人院を恋きこえぬなくとにかくにつけても世はたゝ火をけちたるやうになに事もはへなきなけきをせぬおりなかりけりまして殿のうちの人〳〵御方〳〵宮たちなとはさらにもきこえすかきりなき御事をはさる物にて又かのむらさきの御有さまを心にしめつゝよろつの事につけて思出きこえ給はぬ時のまなし春の花のさかりはけになかゝらぬにしもおほえまさる物となん二品宮のわか君は院のきこえつけ給へりしまゝに冷泉院の御門とりわきておほしかしつき后の宮もみこたちなとおはせす心ほそうおほさるゝまゝにうれしき御うしろみにまめやかにたのみきこえ給へり御元服なとも院にてせさせ給十四にて二月に侍従になり給ふ秋右近中将に成て御たうはりのかゝいなとをさへいつこの心もとなきにかいそきくはへておとなひさせ給おはしますおとゝちかきたいをさうしにしつらひなとみつから御覧しいれてわかき人もわらはしもつかへまてすくれたるをえりとゝのへ女の御きしきよりもまはゆくとゝのへさせ給へりうへにも宮にもさふらふ女房の中にもかたちよくあてやかにめやすきはみなうつしわたさせ給つゝ院のうちを心につけて住よくありよく思へくとのみわさとかましき御あつかひくさにおほされ給へり故ちしのおほい殿の女御ときこえし御腹に女宮たゝ一所おはしけるをなむかきりなくかしつき給御ありさまにおとらすきさいの宮の御おほえのとし月にまさり給けはひにこそはなとかさしもとみるまてなんはゝ宮は今はたゝ御をこなひをしつかにし給て月の御念仏年に二たひの御八講おり　くのたうとき御いとなみはかりをし給てつれ　くにおはしませは此君の出入給ふをかへりておやのやうにたのもしき影におほしたれはいと

あはれにて院にも内にもめしまとはし春宮もつき　くの宮達もなつかしき御あそひかたきにてともなひ給へはいとまなくくるしくいかて身をわけてしかなと覚給けるをさな心ちにほのきゝ給しことのおり　くいふかしうおほつかなう思わたれと問へき人もなし宮にはことのけしきにてもしりけりとおほされんかたはらいたきすちなれはよとゝもの心にかけていかなりける事にかはなにの契にてかうやすからぬ思そひたるみにしもなりいてけんせんけうたいしの我身にとひけんさとりをもえてしかなとそひとりこたれ給ひける

　おほつかな誰にとはましいかにしてはしめもはてもしらぬ我身そいらふへき人もなしことにふれてわか身につゝかある心ちするもたゝならす物なけかしくのみ思めくらしつゝ宮もかくさかりの御かたちをやつし給てなにはかりの御道心にてかにわかにおもむき給けんかくおもはすなりける事のみたれにかなすうしとおほしなるふしありけん人もまさにもりいてしらしやは猶つゝむへき事のきこえによりわれにはけしきをしらする人のなきなめりとおもふ明くれつとめ給やうなめれとはかなくおほとき給へる女の御さとりのほとにはちすの露もあきらかに玉とみかき給はんこともかたしいつゝのなにかしも猶うしろめたきをわれ此み心ちをおなしうは後の世をたにとおもふかのすき給ひけんもやすからぬ思にむすほゝれてやなとをしはかるに世をかへてもたいめむせまほしき心つきて元服は物うかり給けれとすまひはてすをのつから世中にもてなされてまはゆきまてはなやかなる御身のかさりも心につかすのみ思しつまり給へり内にもはゝ宮の御方さまの御心よせふかくていとあはれなる物におほされきさいの宮はたもとよりひとつおとゝにて宮たちももろともにおひいてあそひ給し御もてなしをさ　くあらため給はす末にむまれ給て心くるしうおとなしうもえみをかぬ事と院のおほしの給ひしを思出きこえ給つゝおろかならす思きこえ給へり右のおとゝもわか御子ともの君たちよりも此君をはこまやかにやうことなくもてなしかしつきたてまつり給ふむかし光君ときこえしはさる又なき御おほえなからそねみ給人うちそひはゝ方の御うしろみなくなと有しに御こゝろさま物ふかく世中をおほしなたらめし程にならひなき御光をまはゆからすもてしつめ給ひつゐにさるいみしき世のみたれもいてきぬへかりし事をもことなくすくし給て後の世の御つとめもをくらかし給はすよろつさりけなくてひさしくのとけき御心をきてにこそありしか此君はまたしきに世のおほえいとすきて思あかりたる事こよなくなとそものし給ふけにさるへくていとこの世の人とはつくりいてさりけるかりにやとれるかともみゆることそひ給へりかほかたちもそこはか

といつこなむすくれたるあなきよらとみゆる所もなきかたゝいとなまめかしうはつかしけに心のおくおほかりけなるけはひの人にゝぬなりけり香のかうはしさそ此世のにほひならすあやしきまてうちふるまひ給へるあたり遠くへたゝるほとのをい風にまことに百ふのほかもかほりぬへき心ちしけるたれもさはかりになりぬる御有さまのいとやつれはみたゝありなるやはあるへきさま　くに我人にまさらんとつくろひよういすへかめるをかくかたはなるまてうちしのひたちよらむものゝくまもしるきほのめきのかくれ有ましきにうるさかりてをさ

　くとりもつけ給はねとあまたの御からひつにうつもれたる香のかともゝ此君のはいふよしもなきにほひをくはへおまへの花の木もはかなく袖ふれ給ふむめの香は春さめのしつくにもぬれ身にしむる人おほく秋の野にぬしなきふちはかまももとのかほりはかくれてなつかしきをひ風ことにおりなしからなむまさりけるかくいとあやしきまて人のとかむる香にしみ給へるを兵部卿の宮なんこと事よりもいとましくおほしてそれはわさとよろつのすくれたるうつしをしめ給ひ朝夕のことわさにあはせいとなみ御前のせんさいにも春は梅花そのをなかめ給秋はよの人のめつる女郎花さをしかのつまにすめる萩の露にもをさ　く御心うつし給はす老をわするゝ菊におとろへ行藤はかま物けなきわれもかうなとはいとすさましき霜かれのころをひまておほしすてすなとわさとめきて香にめつる思をなんたてゝこのましうおはしけるかゝる程にすこしなよひやはらきてすいたる方にひかれ給へりと世の人は思きこえたりむかしの源氏はすへてかくたてゝその事とやうかはりしみ給へる方そなかりしかし源中将此宮にはつねにまいりつゝ御あそひなとにもきしろふ物のねをふきたてけにいとましくもわかきとち思かはし給ふつへき人さまになん例の世人はにほふ兵部卿かほる中将ときゝにくゝいひつゝけてその比よきむすめおはするやうことなき所ゝは心ときめきにきこえこちなとし給もあれは宮はさま　くにおかしうも有ぬへきわたりをはの給ひよりて人の御けはひありさまをもけしきとり給ふわさと御心につけておほすかたはことになかりけり冷泉院の女一の宮をそさやうにてもみたてまつらはやかひありなんかしとおほしたるはゝは女御もいとをもく心にくゝ物し給あたりにてひめ宮の御けはひけにいと有かたくすくれてよそのきこえもおはしますにましてすこしちかくもさふらひなれたる女房なとのくはしき御有さまのことにふれてきこえつたふるなともあるにいとゝ忍ひかたくおほすへかめり中将は世中をふかくあちきなき物に思すましたる心なれは中　く心とゝめて行はなれかたき思やのこらむなとおもふにわつらはしきおもひあらむあたりにかゝ

つらはんはつゝましくなと思すて給さしあたりて心にしむへきことのなきほとさかしたつにや有けむ人のゆるしなからん事なとはまして思よるへくもあらす十九になり給とし三位の宰相にて猶中将もはなれす御門きさきの御もてなしにたゝ人にてはゝはかりなきめてたき人のおほえにて物し給へと心の中には身を思しるかたありて物あはれになともありけれは心にまかせてはやりかなるすき事をさ　くこのますよろつの事もてしつめつゝをのつからおよすけたる心さまを人にもしられ給へり三宮の年にそへて心をくたき給ふめる院のひめ宮の御あたりをみるにもひとつ院の中にあけくれ立なれ給へはことにふれても人の有さまをきゝみたてまつるにけにいとなへてならす心にくゝゆへ　くしき御もてなしかきりなきをおなしくはけにかやうなる人をみんにこそいけるかきりの心ゆくへきつまなれと思なから大かたこそへたつる事なくおほしたれひめ宮の御方さまのへたてはこよなくけ遠くならはさせ給もことはりにわつらはしけれはあなかちにもましらひよらすもし心より外の心もつかは我も人もいとあしかるへき事と思しりて物なれよる事もなかりけりわかゝく人にめてられんとなり給へる有さまなれはゝかなくなけのこと葉をちらし給ふあたりもこよなくもてはなるゝ心なくなひきやすなるほとにをのつからなをさりのかよひ所もあまたになるを人のためにこと　くしくなともてなさすいとよくまきらはしそこはかとなくなさけなからぬほとの中　く心やましきを思よれる人はいさなはれつゝ三条の宮にまいりあつまるはあまたありつれなきをみるもくるしけなるわさなめれと絶なんよりは心ほそきに思わひてさもあるましきゝはの人　くのはかなき契にたのみをかけたるおほかりさすかにいとなつかしうみ所ある人の御有さまなれはみる人みな心にはからるゝやうにてみすくさる宮のおはしまさむよのかきりは朝夕に御めかれす御覧せられみえたてまつらんをたにとおもひの給へは右のおとゝもあまた物し給御むすめたちをひとり　くはと心さし給なからえことにいてたまはすさすかにゆかしけなきなからひなるをとは思なせと此君たちをおきて外にはなすらひなるへき人をもとめいつへき世かはとおほしわつらふやむことなきよりも内侍のすけ腹の六の君とかいとすくれておかしけに心はへなともたらひておひいて給ふを世のおほえのおとしめさまなるへきしもかくあたらしきを心くるしうおほして一条の宮のさるあつかひくさもたまへらてさう

　くしきにむかへとりてたてまつり給へりわさとはなくてこの人ゝにみせそめてはかならす心とゝめ給てん人の有さまをもしる人はことにこそあるへけれなとおほしていといつくしくはもてなし給はすいまめかしくおかしきやうにもの

このみせさせて人の心つけんたよりおほくつくりなし給ふのり弓のかへりあるしのまうけ六条院にていと心ことにし給てみこをもおはしまさせんの心つかひし給へりその日みこたちおとなにおはするはみなさふらひ給きさい腹のはいつれともなくけたかくきよけにおはします中にも此兵部卿の宮はけにいとすくれてこよなうみえ給ふ四のみこひたちの宮ときこゆる更衣腹のは思なしにやけはひこよなうおとり給へり例の左あなかちにかちぬれいよりはとく事はてゝ大将まかて給兵部卿宮ひたちの宮きさき腹の五の宮とひとつ車にまねきのせたてまつりてまかて給宰相中将はまけかたにてをとなくまかて給にけるをみこたちおはします御をくりにはまいり給ふましやとをしとゝめさせて御子の右衛門のかみ権中納言右大弁なとさらぬ上達部あまたこれかれにのりましりいさなひたてゝ六条院へおはす道のやゝ程ふるに雪いさゝかちりてえむなるたそかれ時也物のねおかしきほとにふきたてあそひて入給ふをけにこゝをゝきていかならむ仏の国にかはかやうのおりふしの心やり所をもとめむとみえたりしん殿の南のひさしにつねのこと南むきに中少将つきわたり北向にむかひてゑかのみこたち上達部の御座あり御かはらけなとはしまりて物おもしろく成行にもとめこまひてかよる袖とものうちかへすは風に御前ちかき梅のいといたくほころひこほれたるにほひのさとうちゝりわたれるに例の中将の御かほりのいとゝしくもてはやされていひしらすなまめかしはつかにのそく女房なともやみはあやなく心許なきほとなれと香にこそけに似たる物なかりけれとめてあへりおとゝもいとめてたしとみ給ふかたちようゐも常よりまさりてみたれぬさまにおさめたるをみて右のすけもこゑくはへ給へやいたうまらうとたゝしやとのたまへはにくからぬ程に神のますなと